essay

北極圏の農業？
―白夜の国フィンランド―

現代ビューロー取締役会長
北海道フィンランド協会専務理事
井口光雄

成田からの直行便で十時間ちょっと、機首を下げはじめたジェット機の窓に緑一杯の大地が開けていた。北海道ならさしずめ帯広か女満別の空港に着陸するような感じが、北欧のフィランドの第一印象である。

ヨーロッパの最北の国の一つフィンランドは、緯度を聞くと大抵の人はびっくりする。国の一番南にある首都のヘルシンキでも北緯六十度、カムチャッカ半島の付け根あたりだ。国の北部のラップランドになると殆んどが北極圏に入る。

そんな北国フィンランドも、メキシコ湾暖流が近くの大西洋岸を北上してくるなどいくつかの要因で、気候は私達の住む北海道とそんなに変わらず、農業も昔からとても盛んだ。ヘルシンキの七月は、日中の平均気温が十九度を越え、暑い日には三十度にも昇る。五月の中間から八月の上旬までは白夜の季節で、従って一日の日照時間が非常に長い。だから、畑では多くの種類の野菜や果物、ベリー類がよく育つ。ちなみに、南部フィンランドでの作物の年間生育期間は、百八十日間にもなるという。

ヘルシンキを訪れる人は、必ずといってもよい程、港に面したマーケット広場を訪れる。夏期には朝六時頃から午後三時頃まで市が立ち、市民や観光客でにぎわっている。冬でも数こそ少ないもののビニールやテントで囲った店が開いている。市で一番目立つのは、果物や野菜を売る店で、リンゴやナシ、トマトなど種類も豊富で値段も安い。花屋さんも多く、各地のこうした朝市を散策するのは、私の楽しみの一つだ。

さて、ここでフィンランドについて簡単に紹介したい。位置は先述のようにヨーロッパの最北にあって、東側はロシアと南北に一千キロ以上も国境を接している。西側はボスニア湾をはさんでスウェーデンと向かい合い、北部のラップランドはノルウェー、スウェーデンと接する。国の広さは日本よりちょっと小さいが、人口は五百万人でこれは北海道よりも少ない。つまり、如何にゆったりとしているかが分かろう。

フィンランドが独立したのは一九一七年、昨年は盛大に七十五周年を祝った。しかし、独立前約一世紀にわたったロシア統治（それ以前はスウェーデン領だったが）は、独立後も大きく影を落とし、ソビエトは国境線を超えて二度もフィンランドを攻め、また第二次大戦後は領土の一部を接収し、また巨額の賠償金を課してフィンラ

ヘルシンキの朝市　果物や野菜が豊富だ

ンド国民を苦しめた。

フィンランド人の日本人への親近感は昔から知らされているが、こうしたロシア(ソ連)との歴史的な葛藤を抜きにしては説明できない。日本にも輸入されていたフィンランド産の「トーゴー」名のビールは、日露戦争でロシアのバルチック艦隊を破ったかの東郷元帥の名を冠している。

私がフィンランドを始めて訪れてからもう二十年以上にもなり、これまでいろんな産業に接する機会があったが、農業だけは関わりは薄かった。ただ訪れるたびに北海道産に負けないようなおいしい牛乳を飲み、サイズは小さいが上等なジャガイモを食べ、チーズやバター、パンなど、殆んど自国産の材料を用いた食品を食べていたのだから農業と無縁というわけではなかったろう。

この一文を書くために東京のフィンランド大使館から取り寄せた資料、「Northern Vitality（北の活力）―フィンランドの農業―」という冊子の冒頭に「〝北極圏のそばの農業ですって？〟と皆さんはよく尋ねるが、私たちはすかさず〝ええ、家庭農場をベースに、新鮮で純粋、高品質が自慢の農産品を作っています〟と答えます」と記されている。近年輸出も好調なフィンランド産食品の特徴と自信がうかがわれる。

しかしフィンランドの農業も第二次大戦後は苦難の途を歩んで来た。一九五〇年当時、労働人口の四〇％近くも占めていた農業従事者は、機械化の進展や余剰農産物の輸出の落ち込み、さらに日本もそうだったが、社会的経済的な構造変化の中で減少の一途をたどり、今日では約七％の十六万人弱である。耕地面積は、北極に近いだけに国土の七・二％にすぎないが、北海道の二倍はあり、農業従事者の数が本道とあまり変わらないので、経営面積はフィンランドの方が二倍以上広いようだ。

今日のフィンランド農業は、酪農が農業所得の四分の三を占めている。従って耕地の四〇％は干し草で、その他は麦類やてん菜、ジャガイモなどが主、ラップランドでは少数民族のサーメ人が約二十万頭のトナカイを飼育している。なお、フィンランドで消費する食品の殆んどは、現在、工業的に生産されており、原料の八五％が国産である。

「フィンランドの夏は短いが、清らかである。北で育つ食物は純粋で、味もすばらしい。何故ならば、国土に人は密集して住んではいず、汚染もきわめて少ないから

カウスティネンの農家の婦人たち、左端が著者

だ。」と前述の「北の活力」は書いている。統計によると、カドミウムはベルギーやニュージーランドの四分の一以下、水銀はドイツの二十分の一、鉛はベルギーの二十分の一で日本の四分の一以下など、フィンランドは世界で最も値の低い国の一つだ。こうしたことも理由となってフィンランド産品の海外での評判は良いようだ。

ところで私は、三年前の夏、妻と二人でのんびりフィンランド国内を旅して歩いた。ボスニア湾に近い中西部の小さな町カウスティネンでは世界的に知られる民族音楽祭が開かれていて、フィンランド全土から、美しい民族衣装で着飾った町の音楽家たちが集まり、十日間にわたってフォーク・ミュージックやダンス、様々な催しをくりひろげていた。

私たち二人は、近くにヘルシンキの友人の実家の農家があったのでご厄介になり、民族音楽祭を楽しんだ。核家族化の進むフィンランドだが、農村部はまだ大家族が多い。友人の実家も、両親とその姉妹など年寄りたちが仲良く一緒に暮らしていた。

滞在はとても楽しかった。ぶらぶら食後の散歩をしたり、森林浴に身をゆだねたり、牛小屋をのぞいたり、夕方にはサウナが待っている。特に皆んなで一つの食卓を囲む夕食は、友人のお母さんたちが、自家製の材料や近くの湖でとれた魚などを腕によりをかけて料理しただけに、存分に味あわせてもらった。

近年フィンランドでは、こうした農家に宿泊滞在するファーム・ステイが人気を呼んでいて、日本からも若い人たちの利用が増えている。私たちの北海道フィンランド協会でも、ご紹介をしているので、ご関心のある方はぜひどうぞ、（電話・札幌二七一一〇八六四）

森と湖の国フィンランド、音楽の好きな人はシベリウスを、小さなお子さんやお母さん方は、サンタさんやムーミンを思い出されるかもしれない。旅をするなら白夜の頃もよいが、しんしんと冷え込む冬の夜は、神秘のオーロラが歓迎しくれる。美しい自然と人の心の暖かさにふれるフィンランドの旅を一度はおすすめしたい。